江戸時代の瀬戸窯と京焼風陶器

仲　野　泰　裕

はじめに

瀬戸、赤津、下品野、下半田川、水野等の各地区を含めた瀬戸地域において、江戸時代に焼かれた陶器には、多種多様なものが認められる。しかし、これらの中には、短い時期ごとにあるいは継続して、他産地の直接、間接的な影響をうかがわせるような、少し趣きを異にした陶器が焼かれている。これは、古くより日本の窯業生産の中心地として操業してきた、瀬戸窯の性格に変化が生じてきたことを示している。

この具体的な例として、他窯において生産された需要の高い陶磁器の模倣生産がある。しかし、これは瀬戸窯に限ったことではなく、他の地方窯においても同様の傾向を指摘することができ、窯業生産地として生き残ってゆくためのてだてでもあった。

この結果生産された製品は、他産地と共通性のある特徴をもつと共に、各窯業地本来の特徴もかさねもっており、その時期ごとの産地、消費地における共伴関係等を含めた総合的な比較検討により、時代的な位置付けも可能となってくる。

ここでは、その視点として京焼風陶器、肥前陶磁、備前焼等の影響を掲げることができるが、まず第一に、いわゆる京焼風陶器を中心として、瀬戸窯に認められるこれらの影響を模索すると共に、18～19世紀の瀬戸地域における陶器生産の一端を明らかにしようとするものである。

1. 遺跡出土の京焼風陶器

(1) 京焼風陶器

京焼風陶器という名称は、京焼系諸窯以外の窯跡から、草書体「清水」を始めとする印銘を伴い、それぞれの窯において恒常的に使用(注1)される陶土とは異なる、非常に緻密で鉄分の少い陶土を用いて、精緻に成形された製品の出土することが知られるようになったため、この名称が使用されるようになった。これらの京焼風陶器について大橋康二氏は、御器（呉器）手風のⅠ類と、楼閣山水文を伴なうⅡ類とに分類(注2)しているが、ここでは後者を中心に述べるものである。

ここで述べる京焼風陶器には、碗、香炉（火入か）等では、胴部外側面に、皿では見込み部にいずれも呉須又は鬼板を用いて楼閣山水文が描かれている。しかし、楼閣山水文は、若干の相違は認められるものの、肥前磁器製品や陶胎染付製品の中に比較的多く認められる文様でもあり、京焼製品の文様を写すことによって生じたものではないのかも知れない(注3)。そして、この点については、京焼系諸窯において、窯跡等から出土する確実な資料に基づく調査が進まないことには、最終的な結論は下せないであろう。

各遺跡から出土する京焼風陶器は、碗類が最も多く、中・小の皿類がこれに次ぐ量である。胎土は、極めて緻密で均一であり、気泡、砂粒等は認められない。堅く良く焼き締ったものと、やや軟質なものとがあるが、いずれも精緻な轆轤及び篦削りにより、薄手に仕上げられている。釉薬は、細かい貫入の入る透明釉が、薄く均一に掛けられているが、酸化気味の焼成のためか、胎土と共にやや卵黄色を呈するものが多い。各器種共に、腰部最下部、高台及び外面底部は無釉である。高台は、ほぼ直立する輪高台であり、その断面は、方形又は長方形を示しており全般に低めである。外面底部は平らに成形した後、その中央に直径1～2㎝の円圏文を削り、その中ある

いは周辺部に、草書体「清水」印を始めとする印銘を施した資料が多い。

(2) 在印資料の出土状況

いわゆる京焼風陶器は、5箇所の窯跡と多数の消費遺跡からの出土が知られているが、残念ながら京焼系諸窯からの出土例は知られていない。このため、産地の同定には不充分な点も多く、消費遺跡からの出土資料の中には、京焼製品が含まれているものと考えられる。

ア. 窯跡（図版Ⅱ－**17. 18**）

窯跡からの出土例は、現在までのところ清源下窯跡(注4)（佐賀県伊万里市大川内町）、お経石窯跡(注5)（同）、鍋島藩窯跡(注6)（同）、木原地蔵平東窯跡(注7)（長崎県佐世保市）、尾戸窯跡(注8)（高知市）の5箇所と後に述べる瀬戸諸窯がある。前記4箇所は、発掘調査された窯跡である。

出土資料数は、鍋島藩窯跡の出土量が最も多い。形状の概要はすでに述べたとおりであるが、肥前諸窯産の京焼風陶器は、いずれも削り出しの輪高台である。中皿等では、炻器質に焼き締ったものが多く、露胎部の釉境に焰色の出る資料が認められる。一方、木原地蔵平東窯跡出土例は、1点のみであり、腰部がやや厚手の成形となっている。又、尾戸窯跡からも、丸山和雄氏によって京焼風陶器が採集されている。

窯跡出土の印銘資料について大橋康二氏は、大川内所在の3窯跡において3種類の草書体「清水」印があり、地蔵平東窯跡と尾戸窯跡（2種類）を含めて少くとも6種類以上の存在を確認している。さらに、大川内所在の3窯跡から出土する「森」「柴」「善」「市」「市川」「冨永次」等の印銘については、同地区の陶家名である可能性の高いことが指摘されている。又、「木下弥」についても数種類知られているが、尾戸窯跡出土資料では「木弥」となっている。さらに、消費遺跡において比較的多くの出土が知られる「小松吉」「山原仲」については、現在までのところ窯跡出土資料の中から検出されていない。

在印京焼風陶器の時代観について大橋康二氏は、高台内に認められる円圏文の小形化、楼閣山水文の簡略化傾向等から、清源下・お経石窯跡と鍋島藩窯跡物原出土資料との間には、年代差を認めうると指摘すると共に、消費遺跡における肥前磁器との共伴等から、17世紀後半を中心とした時期に、在印京焼風陶器が焼造されたものと位置付けている。

イ. 消費遺跡

消費遺跡における出土例は、近年の都市部の発掘調査の増加に伴い、多くの近世陶磁と共に検出されている。このためその出土例も急速に増加しており、北は福島県いわき市の四郎作遺跡に(注9)まで及んでいる。そして、これらの資料群を精査してゆくと、文様の描法、胎土、釉調等によって幾かのグループに分類できることがわかってきた。しかし、産地同定、時期の特定等には、不充分な点が多い。印銘についても、少くとも6種類以上に分類できる草書体「清水」印が最も多い他「木下弥」「小松吉」「小松久」「森」「柴」「新」「蔵」「次武」「福次」「中村金」等が知られており、不明印を含めれば、20種類以上が出土している。

(3) 施印の消滅と京焼風陶器の消長（図版Ⅱ－**19**）

京焼風陶器の中で在印資料を中心にその概要を述べてきた。ここでは、楼閣山水文の描法の変化と、他の特徴のかかわりについてさらに詳しくみることとする。まず、17世紀後半に位置付けされている在印資料では、濃い細線と、ダミ的な筆つかいによる淡く太い線との両者を用いて、楼閣山水文を描いている。次の段階では、線の太さの差は認められるものの、筆運びが早く文様

の崩れが顕著となる。さらに次の段階では、線の太さが一率となり、文様はさらに崩れ、僅に楼閣山水文の残影を認める程度となり、印銘は消滅している。そしてこの時期には、碗類等が認められなくなり、口径13㎝内外の皿類のみが知られている。又、成形は、京焼風陶器の特徴を失いつつあり、腰部下半、底部が厚手となっている。さらに高台の削り出しは、外面より内面が深く削り込まれる傾向にあり、高台内の円圏文も消滅している。胎土は僅に荒くなり、黄褐色に近いものが多く、炻器質に焼き締ったものは認められなくなっている。そして、見込み部にドーナツ状の輪ハゲの認められるものもある。このため、胎土の特徴を除くと、他の唐津系諸窯製の皿類と似かよった成形となっている。

このような無印京焼風陶器は、どうやら皿類に限られるようであるが、在印資料と比較して、出土遺跡数、出土点数共に減少している。窯跡における出土例についても、鍋島藩窯跡物原からだけその出土が知られていたが、近年、椎ノ峯下窯跡（佐賀県伊万里市）、内田大谷窯跡（武雄市）等の窯跡出土資料の再検討が進むと共に、その中より検出されるようになっている。(注10)(注11) 資料的には不充分な点が多いので、時期的な位置付けをするのは困難であるが、天明三年（1783）の浅間山噴火に伴う泥流により埋没していた中村遺跡（群馬県渋川市）から小破片が数例出土しており、この時期においては僅に使用されていた可能性もあり、今後詳細な検討を加える上での目安となろう。

2. 瀬戸窯における京焼風陶器

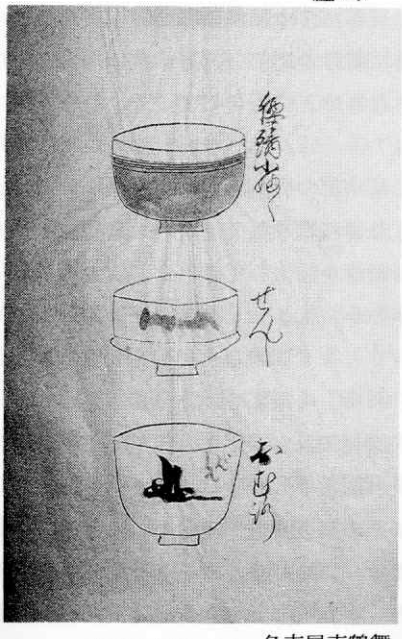
(1) 文献に認められる京焼写し

瀬戸窯に関する文献で、すでに公開されているものは決して多いとはいえない。しかし、現在瀬戸市史陶磁史篇編纂のための文献調査が続けられており、事業の進行にあわせてこれらの資料が公開されればさらに事例は増加するものと思われる。

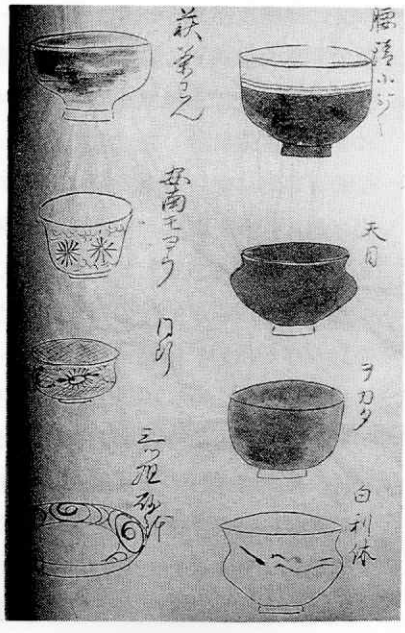
○ 『享保六年（1721）丑年　御数寄屋方道具帳』(注13)

一、御深井焼御茶碗　八　内三ツ御室焼

とあり、名古屋城内御深井丸に築かれた御深井窯において御室焼写しが焼かれていたことをうかがうことができる。実際に焼かれた製品の特徴については不明であるが、中国・朝鮮の陶磁器と共に、御深井窯において写されているということは、御室を始めと



挿図－1 『瀬戸史料・全』 名古屋市鶴舞中央図書館蔵

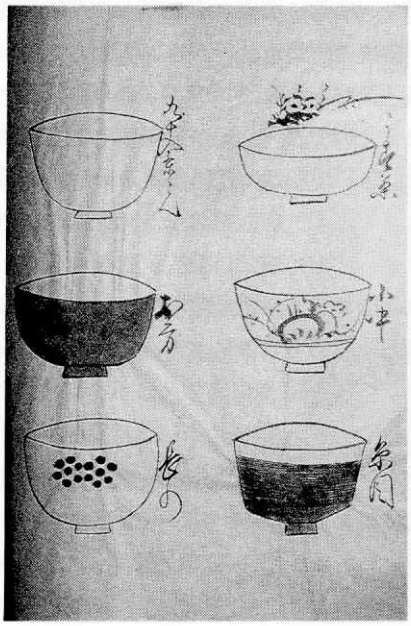


挿図－2 同

する京焼製品が、かなり高い評価を得ていたことがわかる。

○『瀬戸史料・全』(注14)

これは、『尾張志』（天保一五年刊）編纂の際の調査記録と(注15)伝えられるもので、その挿図の中には、「をむ路」「腰錆小ぶく」等の碗類を始めとして、瀬戸窯で焼かれていた主な製品が紹介されている。なかでも「をむ路」「腰錆小ぶく(婦く)」等は、実際に焼かれていた製品と対照させることができるのを始め、長期にわたって焼き続けられているため、器形的変遷をたどることも可能である。この他、「せんじ」「う寿茶」「広東」「糸目」「長の」等について、製品と対照させることができる。「せんじ」は、煎じ、「う寿茶」は、薄茶、「広東」は、肥前磁器にも多く知られる中国写しの碗と考えることができるが、用途等を含めた詳細な点については不明な点が多く、本稿の主題からも逸脱するので、ここでは紹介するだけに留めたい。又、「糸目」については、模備前窯的手法であるため別稿にゆずることとしたい。



挿図－3 『瀬戸史料・全』 名古屋市鶴舞中央図書館蔵

挿図－4 同

○ 『天保十三年（1842）辛丑正月改　尾張物直上帳』(注16)

（略）

一、腰錆大花　三十六入　七匁九分

一、同　間花(注17)　六匁七分

（略）

一、腰サビ小服(注18)　九十八入　八匁四分

とあるように、腰錆の手法は、碗類だけに留まることなく、大・中花瓶が焼かれていたことが、文献の上からも認められる。

瀬戸窯と他窯との接点を暗示させる文献を紹介した。個々に注釈したように、「をむ路」については、現在までのところ『瀬戸史料・全』の他に、その記述は認められない。これに対して「腰錆」については、碗類に限らず、花瓶についても記述が認められ、多くの器種にわたる生産が予測される。

(2) 「をむ路」と「腰錆小ぶく」

ア. 「をむ路」

「をむ路」は、野々村仁清が、仁和寺門前（京都市右京区）に1646年頃開いた窯で、仁清没

後も焼き続けられたといわれる御室焼を、広義に示唆するものと考えられる。これは、『瀬戸史料・全』に図示された碗を始めとし、窯跡、消費遺跡等から出土する資料の胎土・焼成を考えあわせても、まちがいないものと思われ「御室」と表記してもさしつかえないであろう。ただし、後に述べる上絵付丸碗等が、包括された名称であったのかは不明である。

胎土は、いずれも緻密であり、卵黄色気味の白色に近い色調を呈し、薄手に成形されている。主文様は、呉須を用いた崩れ楼閣山水文であり、高台を含む外面底部及びその周辺部を除く器面全体に、薄く均一な透明釉を掛けており、非常に細かい貫入が認められる。しかし、楼閣山水文は、大川内諸窯産資料のように、褐色を帯びた発色例は少く描法についてもダミ的な筆使いは認められない。さらに、大川内諸窯産資料に認められる皿（見込みに楼閣山水文）類は、瀬戸窯においては確認されていない。

イ. 「腰錆小ぶく」

『瀬戸史料・全』には、「腰錆小ぶく」として碗が紹介されているが、窯跡からは、さらに仏花瓶、小瓶、火入、小壷、鉢等の出土が知られている。又、伝世資料である狛犬にも、この施釉法は認められ、18世紀前半代の紀年銘資料が多く知られている。

「腰錆」碗は、『瀬戸史料・全』のまとめられた天保年間の前期には、すでに「小ぶく」となっていたが、その系譜を遡ると、もうひとまわり大形の碗を祖形(注19)としていたことがわかっている。全体に薄手成形で、高台は低く方形の断面を示し、胴部をめぐる数条の沈線文と、隣りあわせた2箇所に指先で押した凹文を施している。そして、内面及び口縁部外側面上半に灰釉、これを除く器面全体に錆釉を掛けている。ただし、この錆釉は、時期が降ると共に鉄釉に近い発色となり、識別できないものが多くなっている。

この「腰錆」碗の器形変化については、拙稿「浅間山の大噴火（天明三年）に伴う泥流層下の瀬戸美濃陶器」においてその概要を示したとおりである。その後、藤沢良祐氏は「西茨第1・2号窯発掘調査報告」(注21)の付篇において、さらに研究を進め、18～19世紀の第2四半期にかけて6段階(注22)に区分する編年観を提示している。

(3) 「御室」碗と「腰錆」碗の変遷

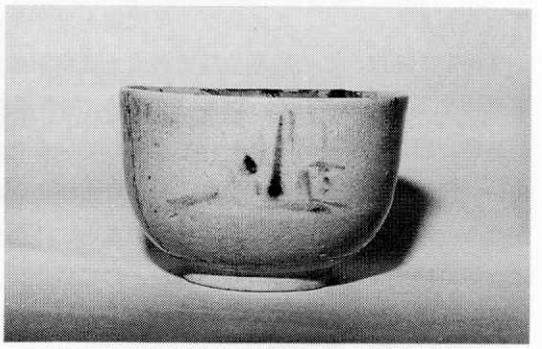
それぞれの変化については、型式変化のほぼ安定している「腰錆」碗を中心に述べ、並行する形で「御室」碗と関連資料を順に併記してゆくものとする。いずれも、精選された緻密な胎土を用い、胴部なかほどまで丹念な篦削りによる薄手成形である。平に成形された外面底部に、貼付による輪高台を伴い、酸化気味に焼成されているものが多いのが共通の特徴である。

第Ⅰ期（図版Ⅰ－**1**～**4**）

「腰錆」碗では、腰部の張りが強く口縁部上端へむけてやや開き気味に立ち上る。腰部に認められる篦削り痕は、同時期の「御室」碗に比べてやや顕著である。断面方形を示す径の広い貼付による輪高台であり、幅は3㎜内外である。胴部のなかほどに沈線文が鋭く巡らされており、その下方の、隣りあわせた2箇所に指先の押圧による凹文が認められる。口縁部外面上部及び内面全体に灰釉、これらを除く部分に錆釉を施した後、高台端部のみ軽くぬぐいとっている。この時期の「腰錆」碗の一部には、高台の内側底面のほぼ中央に、楷書「清」印の認められる資料があり、杢兵衛窯跡（瀬戸市窯神町）では丸に「清」印、定助窯跡（同市仲切町）では扇形に「清」印が押された資料が出土しているが、「清水」印は知られていない。消費遺跡においては、白川

公園遺跡（名古屋市中区栄）から扇形に「清」印資料、朝日西遺跡（愛知県西春日井郡清洲町朝日）、幅下遺跡（名古屋市西区幅下町）から篆書風不明印を伴う資料が出土している。又、この時期の無印の資料は、動坂遺跡（東京都文京区）、旧芝離宮遺跡（同港区）等多くの出土がある。

「御室」碗は、「腰錆」碗より僅に丸味を帯びた腰部であり、沈線文、押圧文を伴わない他は、ほぼ同様の特徴である。呉須による主文様は、崩れた楼閣山水文であるが、同一の筆を一気に走らせたもので、三川内諸窯産資料に認められるようなダミ状の筆使いや、描線の太さに顕著な差は無い。裏文様は、不明の数本の線描であるが、鳥文を思わせるような事例もある。高台部、外面底部及びこれらの周辺部を除く全面に、薄い灰釉が均一に施されており、かなり細かい貫入が認められる。酸化気味の焼成のためか、胎土、釉薬共に黄褐色を帯びたものとなり、京焼陶器を彷彿とさせるものである。在印資料は、定助窯跡より扇に「清」印、東洞窯跡（瀬戸市東洞町）より丸に「戸瀬」印のある資料が出土している。又、杢兵衛窯跡からは、高台内の外面底部に、浅くて細い沈線による円圏文を残す資料が出土している。消費遺跡からは、白川公園遺跡より丸に「戸瀬」印資料が出土している他、白山四丁目遺跡（東京都文京区）等からは、この時期の「御室」碗が出土している。



挿図－5　第Ⅰ期の「腰錆」碗、「御室」碗

第Ⅱ期（図版Ⅰ－**5**～**6**）

「腰錆」碗は、腰部に僅に丸味を帯びるようになり、口縁部へむけてやや開き気味に立ち上がる。高台径は、やや狭くなる傾向があるが、断面は方形である。胴部のなかほどに沈線文が施されているが、指先による押圧文は、この沈線上に施される例が多い。錆釉は僅に艶を伴う鉄釉に近いものが認められるようになる。市左衛門窯跡（瀬戸市背戸側町・湯之根町）等からも出土するようになる。(注23)

「御室」碗は、全体に丸味を増し、口縁部へむけて僅に開き気味に立ち上がる。高台径は、やや狭くなり端部に僅に丸味が認められるものがある。呉須を用いた楼閣山水文は、

挿図－6　第Ⅴ期の「腰錆」碗、「御室」碗

さらに崩れを増している。市左衛門窯跡、半田川窯跡（瀬戸市下半田川町）等からも出土。(注24)

第Ⅲ期　（図版Ⅰ－**7**～**8**）

「腰錆」碗は、腰部に丸味を帯び口縁端部へほぼ真直ぐに立ち上がる。胴部なかほどに沈線を伴うが、指先による２箇所の押圧文は認められなくなり、腰部の錆釉は鉄釉と識別できないものが多く認められる。桂蔵窯跡（瀬戸市西茨町）、新七窯跡（同市背戸側町）等からも出土。

「御室」碗は、全体に丸味を増し、口縁端部へほぼ真直ぐに立ち上がる。腰部等僅に厚手の成形となる傾向が認められ、高台径も狭くなる。呉須絵は、さらに簡略化が進んでいる。この時期は、「腰錆」碗と共に市左衛門窯跡からの出土が多く認められる。

第Ⅳ期　（図版Ⅱ－**1**～**4**・**15**・**16**）

「腰錆」碗は、第Ⅲ期とほぼ同様の形状であるが、器高が目立って低くなるのが特徴的である。仲洞窯跡（瀬戸市仲洞町）からも出土。この時期は、天明三年（1783）の浅間山の噴火に伴う泥流層によって埋没した中村遺跡（群馬県渋川市）からの出土資料が、第Ⅳ期の型式と合致すると認められることから、この時期の年代観を推定する拠所の一つとなっている。

「御室」碗は、この時期以降窯跡出土資料が減少しており、特にこの時期に限って対象できる窯跡出土資料が知られていない。このため、消費遺跡出土資料を検索したところ、白川公園遺跡、動坂遺跡、旧芝離宮遺跡等において出土していることが判明した。「腰錆」碗と同様に急速に小形化し、腰部の丸味が増しており、胎土にも僅に砂粒が含まれるようになっている。しかし、文様、篦削り、釉調、焼成等の特徴を総合すると、「御室」碗として理解して良いであろう。窯跡資料によって補完されるまでの仮の資料として紹介しておきたい。

この時期には、先に肥前京焼風陶器の中で述べた皿に類似した皿が瀬戸窯においても焼かれるようになっている。この皿は、「御室」碗に比較するとやや厚手の成形であるが、腰部の篦削りの様子、断面方形に近い貼付の輪高台、施釉範囲、釉調、胎土、酸化気味の焼成等、類似する特徴が多く認められる。ただし見込み部の文様は、楼閣山水文ではなく、呉須と鬼板を用いた梅花文となっている。腰部の下方からゆるやかに立ち上がり、肩部から口縁端部にむけてほぼ直立しており、底部及び腰部下半はやや厚目である。見込みには、鬼板を用いて２輪の花文、呉須を用いて枝状の文様を描くのを基本としている。杢兵衛窯跡、定助窯跡、尾呂窯跡等から出土。(注25) なお、図版Ⅱ－**15**・**16**に示したように見込みに鉄絵を伴う皿が市左衛門窯跡等から出土している。類似の成形であるが腰部以下にも薄く灰釉を掛けている。

第Ⅴ期　（図版Ⅱ－**5**～**9**）

「腰錆」碗は、さらに小形化が進んでおり、特に口径より器高の方が縮小率が高い碗形態となっている。そして、高台径が狭くなるとは逆に幅は広くなり、端部は丸味を帯び雑な貼付となっている。そして、灰釉も厚目でむらのある掛け方となり、沈線文を越えて下半部へ流れ落ちる例も多い。勇右衛門窯跡（瀬戸市西茨町）等からの出土が知られる。

「御室」碗は、「腰錆」碗と同様に小形化が進んでいる。僅に張りをみせる腰部から短く直立して口縁部に達している。高台は、やや下開き状態となり、幅も４㎜内外と広くなる傾向があり、胎土には、僅に砂粒が含まれるようになる。呉須による文様も、すでに楼閣山水文の簡略化という状態ではなく、Ⅲ・Ⅳ期の文様のさらに崩れたものとなっている。裏文様においても、横に不揃いの２本線が引かれる程度となっている。市左衛門窯跡からの出土が知られている。消費遺跡

では、下小足立北遺跡（東京都狛江市）、動坂遺跡等からの出土がある。

この頃より、「長の」（注26）と呼ばれる丸碗が出土するようになる。丸い胴部からやや内傾する口縁端部へゆるやかに立ち上がっており、比較的薄手の成形で均一な胎土である。口縁部上端に接するように2個の花弁文が呉須を用いて描かれており、裏文様として同種の花弁文が1個描かれるのが原則である。高台と外面底部及びその周辺部を除く全体に灰釉が掛けられている。しかし、口縁部上端が内傾しない資料も認められ、第Ⅳ期における存在も考えられるが、資料不足のため充分区分することはできない。小形化したものが、第Ⅵ期にも引き続いて焼かれている。杢兵衛窯跡、新七窯跡、岩右衛門窯跡（瀬戸市湯之根町）、勇右衛門窯跡等からの出土が知られる。

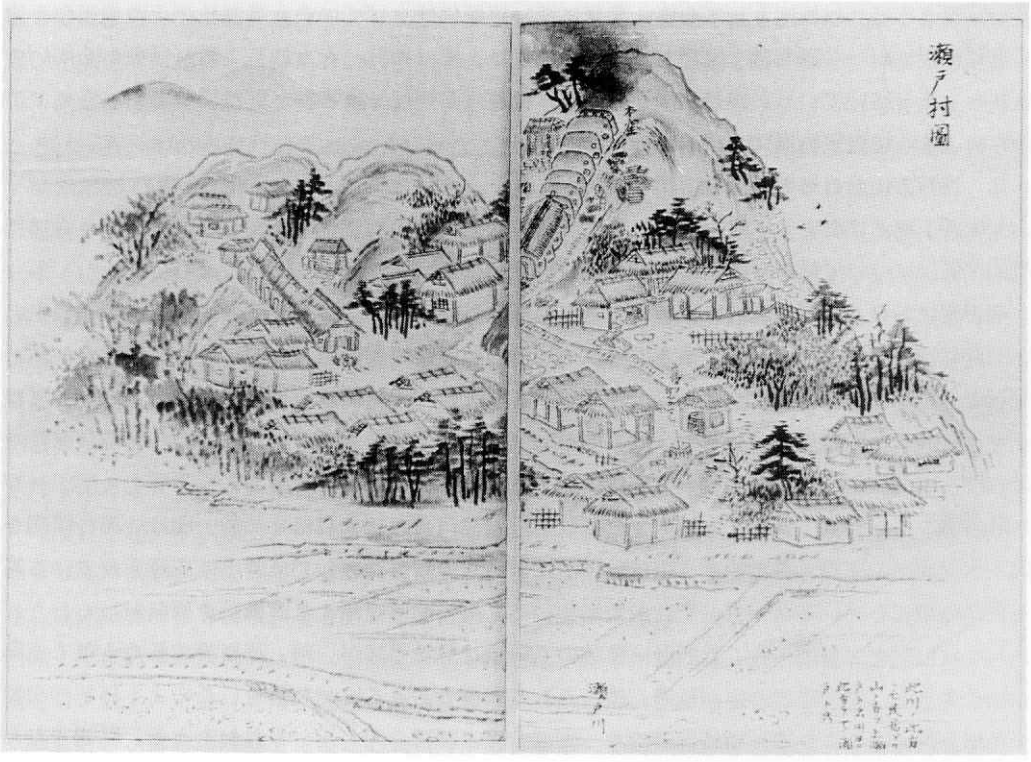
梅花文皿は、小形化しながらこの時期にも勇右衛門窯等において焼き続けられている。

第Ⅵ期　（図版Ⅱ－**10**～**13**）

「腰錆」碗は、さらに小形化が進む一方、腰部が肥厚化しており「せんじ」等の他の器種と紛らわしい形状となる。胴部中央に認められる沈線文の数が減り弱々しい線刻となる。高台幅は、さらに広くなり、端部は丸味を帯びたものとなっている。勇右衛門窯跡、桂蔵窯跡等から出土。

「御室」碗は、さらに小形化が進んでおり底部、腰部、口縁部と単調な成形となり、胎土には僅に砂粒が認められる。文様も粗雑なものとなり、裏文様についても本来の姿からかけ離れており、他器種の文様からの転用とも考えられる。釉薬にもむらが認められ、やや荒い貫入となっている。新七窯跡からの出土が知られ、消費遺跡からの出土は、動坂遺跡等がある。

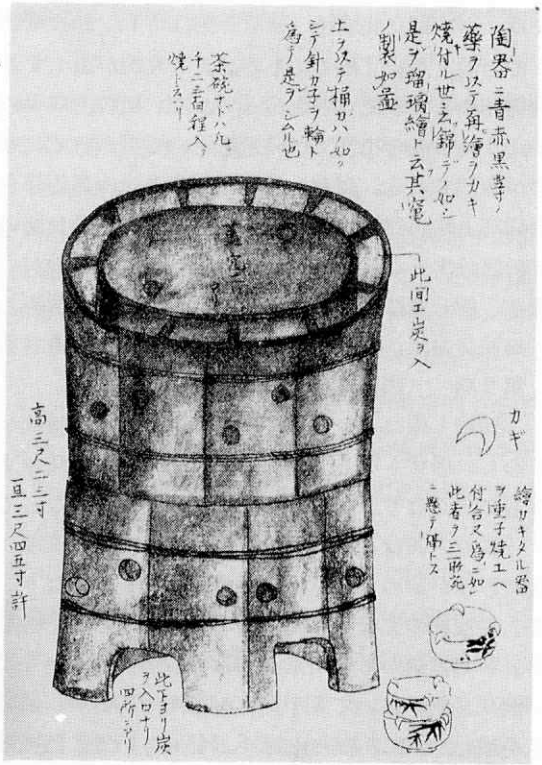
梅花文皿においても小形化が進んでいるが、器高より口径の方が縮小率が大きい。腰部は、丸味を増しているがその分、厚手となっている。花文は、菊花状のものがある等、花弁の表現が不揃いである。市左衛門窯跡、勇右衛門窯跡等から出土。



挿図－7　『張州雑志』第九一巻　「瀬戸村図」　名古屋市蓬左文庫蔵

(4) 上絵付碗　（図版Ⅱ－**14**）

中村遺跡を始めとする多くの近世遺跡より、相当数の上絵付を伴う碗等の陶片が出土しているが、胎土、施文密度、彩料数等に差異があり、すべてが京焼系諸窯産とは考えにくいため、瀬戸美濃諸窯における上絵付製品生産の可能性について前掲拙稿において指摘しておいた。(注27) さらに、天明年間（1781～89）にまとめられた『張州雑志』には、緑、赤、白等の彩料を用いて、やや腰部に張りのある丸碗に、笹文等を施し上絵付窯で焼成する手順が図示されている。これによると、緑、赤等を基調として笹文等比較的単純な文様を丸碗に施していたことがわかる。



挿図－8 『張州雑志』第九一巻 上絵付窯　名古屋市蓬左文庫蔵

一方、瀬戸窯においては杢兵衛窯跡から上絵付を伴う丸碗が出土している。この碗は、体部全体に丸味を帯びており、口縁上端部が僅に内傾している。高台は、低く断面方形を示す貼付による輪高台である。胴部のかなり高い位置まで丹念に篦削りしており、非常に薄い器壁に仕上げている。高台及びその周辺部を除く全面に薄く均一な透明釉を掛けている。上絵付は、緑（銅）、赤（鉄）、青（呉須）を用いて笹状の文様を描いている。18世紀第4四半期に位置付が可能であるが、窯跡出土資料が極めて少いため、さらに類例の増加を待ちたい。(注28)

3. 瀬戸窯における京焼風陶器の年代観

「腰錆」碗と「御室」碗を中心に、型式変化の大筋について述べてきたが、ここではさらに年代的位置付について検討を加えることとする。

瀬戸窯における「御室」碗は、楼閣山水文の崩れ方、「腰錆」碗との成形・焼成上の類似点、在印資料は限られた量、種類である点等、大川内諸窯産京焼風陶器との間に幾かの相違点が認められる。特に印銘の内容については大きな差があり、大川内諸窯産京焼風陶器の多くのものには草書体「清水」印が押されており、清水焼を前提とした生産と考えられる。しかし、瀬戸窯産では、清水焼及び仁清を頂点とする御室焼のいずれにも共通する文字である楷書「清」一字印が押されており、しかも「御室」と総称されていた可能性が高い。さらに「腰錆」碗は、高台端部を除く全面施釉、灰釉・鉄釉の上下掛け分け手法、当時の陶器碗としては薄手に成形されている等を主な特徴としている。一方、肥前磁器においても高台端部を除く全面施釉を原則としており、さらに17世紀中・後期には、透明釉・鉄釉の上下掛け分け手法が、碗、花瓶等に認められる点等を総合すると、肥前磁器の影が色濃く感じられる器種であることがわかる。このように肥前磁器の影響を強く感じさせる「腰錆」碗にも「御室」碗と同種の印が用いられたことと、精選された緻密な胎土、焼成、成形上の特徴等の多くの類似点を考えあわせると、視覚的には大きな隔たり

の認められる両者にも、肥前陶磁を含んだ根元的な深いかかわりが浮かびあがってくるのである。これは、京焼風陶器を含んだ肥前陶磁を、その区別無く瀬戸窯において「御室」碗、「腰錆」碗として模倣生産したものと考えることができるが、この時期の瀬戸窯産京焼風陶器は碗類に限られている。一方では、大川内諸窯産京焼風陶器の碗類が、18世紀を境として順次姿を消してゆく傾向にある。この間の経過年数のとらえ方には問題があるものの、文様、印銘等の相違を考えあわせれば、「御室」碗の出現時期を、大川内諸窯産京焼風陶器の出現より一歩おくれた18世紀第1四半期と考えることができる。(注29) これは、瀬戸窯において同時期に生産された他の製品との関係からも肯定されるものである。その後、大川内諸窯産京焼風陶器は、皿類だけが焼き継がれているが、文様の崩れはさらに進み、成形技法等は旧来の唐津的特徴へと回帰する傾向が強く認められるようになる。その後「御室」碗は、ゆっくりと小形化し、呉須絵も崩れを増しているが、18世紀第4四半期には、異器種を思わせるほどの急速な小形化が認められる一方で、肥前産京焼風陶器皿と類似した皿が焼かれるようになっている。同時期と考えられる「腰錆」碗が、天明三年の浅間山噴火に伴う泥流層下より出土しているので、年代観を裏付ける貴重な資料となっている。この泥流層下より、肥前産京焼風陶器皿の小片が数点出土しているが、全体量としては減少化しているといわれ、瀬戸窯において梅花文皿の出現する時期と符合してくるのである。以降、市左衛門窯、勇右衛門窯等の操業状況や消費遺跡における出土状況から、19世紀第2四半期までの型式変化をたどることができる。

おわりに

近年の近世遺跡の発掘調査の進展により、中世以来国内唯一の施釉陶器を生産してきた窯業地としての伝統をもつ瀬戸窯にも大きな変容が生じてきたことが知られるようになっている。これは、肥前磁器を始めとする新しい陶磁製品の消費地への侵透によるものであり、特に肥前磁器は、18世紀になると海外需要が減少しており、これらの生産力も国内需要へむけられたものと考えられる。一方、この時期の瀬戸地区の窯数は、元禄二年（1689）に10基と記録されているが、(注30) 正徳・享和年間（1711～35）にゆっくりと増加して15基となっており、陶工数等は不明ながら、一つの転機の存在が予測される。さらに、延享五年（1748）に49戸だった窯屋数（陶工数）が、明和七年（1770）には100戸（窯数20基）、安永九年（1780）には113戸（窯数24基）、天明四年（1784）には153戸（窯数24基）と急増しており、大きな転機が訪れていることが予測される。しかし、この時期は、窯屋の急増と、肥前磁器の進出等による滞貨により生産過剰を招き、瀬戸窯はしだいに困窮の度を深めたというのが通説となっている。ところが、その後急速に陶工数等が減少したという記録は知られておらず、これらの人々は引き続き陶器生産に従事することができたものと考えることができる。

一方、これらの現象を裏付ける資料は、「腰錆」「御室」を除くと少く、褐釉を中心としたいわゆる尾呂茶碗、摺絵丸皿、志野丸皿等も、18世紀前半代でその主要な生産期を終わるようであり、前述の窯屋数等の推移をものがたるには、いささか不充分な状況である。ただ、瀬戸において呂宋（ルソ）と呼ばれる銅緑釉の出現、備前窯製品を彷彿とさせる錆釉製品、上野・高取と呼ばれる釉法、刷毛目、鎧手、上絵付等は、従来の瀬戸窯には認められないものであり、これらの出現期を把握することが、緊急の課題であり、これらを中心にさらに詳細な調査研究が必要とされている。

さらに、瀬戸窯における陶器生産は、19世紀になって染付磁器が焼かれるようになると、それ

以降、前者は「本業」後者は「新製」と区別して呼ぶようになっている。そして、多くの窯屋が「新製」に転じてはいるものの、「新製」と称してどのようなものが焼かれていたのかは考古学的に白紙にかえって究明しなおす必要がある。まして、磁器生産が産業的に定着するのはいつ頃であったのかは今後の大きな課題となっている。

いささか憶測、飛躍にすぎた点もあるが、これらの問題点については先学諸氏の御叱正をいただくと共に、さらに具体的資料をふまえて補完することとし、江戸時代の瀬戸窯における陶器生産の歴史について一層の理解を深めてゆきたい。

本稿をまとめるにあたり、藤沢良祐氏、大橋康二氏を始めとする多くの方々と機関より、貴重な資料の提供と数々の御教示をいただいたので、記して心からの御礼を申し上げるものである。又、本稿に掲載した実測図の内、図版Ⅰ－**1. 5. 7.** 図版Ⅱ－**1. 5. 7. 10**～**13. 15. 16. 17. 18** は注・2・22・25 文献より縮尺を統一して引用させていただいた。

大河内定夫　加藤正則　田口昭二　宮石宗弘　（敬称略）

瀬戸市歴史民俗資料館　名古屋市鶴舞中央図書館　名古屋市蓬左文庫　名古屋市見晴台考古資料館

注 1.　京焼の調査研究は、一部の名品を除くと不明な点が多くあるため、胎土等に類似性の認められる畿内地域を含む広い範囲で考えている。近世の信楽焼にも今後注目する必要がある。

注 2.　大橋康二「鍋島藩窯跡出土の京焼風陶器（上）・（中）・（下）」『セラミック九州』№7～9　佐賀県立九州陶磁文化館

注 3.　波佐見焼諸窯等に多く知られる。

注4･5　盛峰雄「お経石窯・清源下窯跡発掘調査略報」『烏ん枕』第29号　伊万里市郷土研究会　1982

注 6.　『大川内山鍋島藩窯跡発掘調査概報（第三次調査）』　伊万里市教育委員会　1976

注 7.　『三川内古窯跡群緊急確認調査報告　木原地蔵平窯跡の発掘調査』　佐世保市教育委員会　1978

注 8.　丸山和雄「土佐のやきもの」『日本やきもの集成10　四国』　平凡社　1982

注 9.　『四郎作遺跡』　福島県いわき市教育委員会　1983

注10.　故水町和三郎氏（元京都試験場第３部長）の収集した参考資料の内。

注11.　故本山彦一氏（大阪毎日及び東京日日新聞社社長）による発掘資料。大橋康二氏御教示。

注12.　拙稿「群馬県渋川市中村遺跡出土の近世陶磁について」『中村遺跡』　群馬県渋川市教育委員会　1986

注13.　大河内定夫「旧藩古帳にみられる瀬戸焼の記録」『金鯱叢書』第二輯　徳川黎明会　1975

注14.　『瀬戸史料・全』　原本は、名古屋市鶴舞中央図書館蔵

注15.　『尾張志』　においては、はっきりとした引用箇所は認められない。ただし、この内容の一部は、『日本近世窯業史』　大日本窯業協会編　1916　にそのまま引用されている。

注16.　『多治見市史　窯業史料編』　多治見市　1976

注17.　同文書の他の部分を読むと、大きさを表記する場合、大・中・小、親・子・孫などの用例が認められるが、それぞれの規格の中間的ものについて「間」を使用している。

注18.　「サビ」だけの表記もあり、模備前窯的手法と考えられる。

注19.　本多静雄『陶磁のこま犬の戸籍簿』　ベルサロン　1976

注20.21. 拙稿「浅間山の大噴火（天明三年）に伴う泥流層下の瀬戸美濃陶器」『研究紀要』5　愛知県陶磁資料館　1986

注22. 「西茨第１・２号窯発掘調査報告」『研究紀要』Ⅵ　瀬戸市歴史民俗資料館　1987

注23. 可児郷窯跡（岐阜県多治見市小名田町）他より「腰錆」碗の出土が知られる。

注24. 半田川窯跡出土資料は、瀬戸市歴史民俗資料館と(財)岐阜県陶磁器陳列館に保管されている資料である。同窯は、かみた１・２号窯跡として発掘調査されているが、全面調査ではなく、両者の出土資料には、若干の差が認められる。このため、窯跡の重複、操業期間の検討など課題が多いためここでは、区別して扱う。

注25.『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅳ）』　愛知県教育委員会　1985

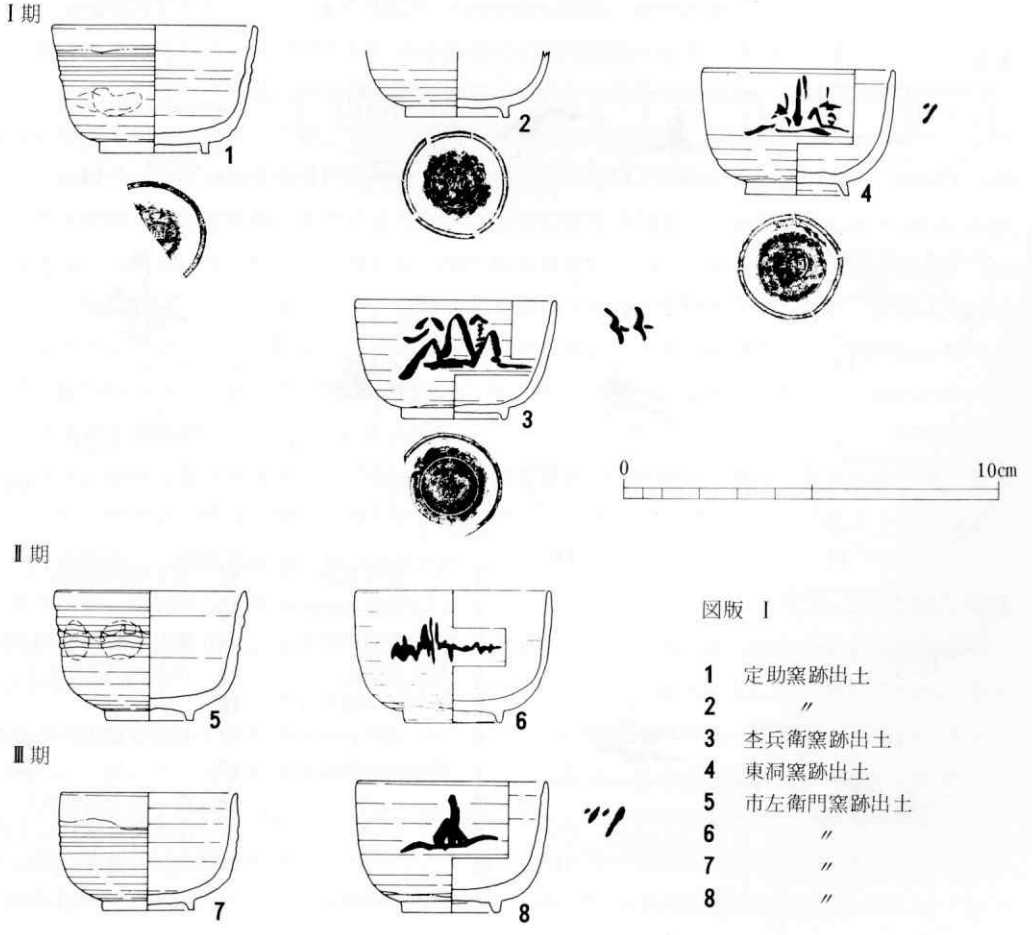
注26.『下小足立北遺跡』　東京都狛江市下小足立北遺跡調査団　1984

注27. 近世信楽窯は、緻密で薄手の陶器を生産している他、京都方面へ陶土を供給しており、今後、調査研究が必要である。

注28. 美濃窯においては、四ツ屋窯跡（岐阜県土岐市土岐津町）から陶胎上絵付の碗、皿が出土。
この他、寛政十一年銘、角形香炉、(瀬戸、洞)、明和六年銘(美濃・大畑)角形香炉等が伝世している。

注29. 藤沢良祐氏は、「17世紀まで遡る可能性がないわけでもない」としている。

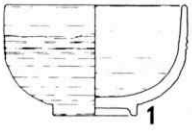
注30.『窯業民俗資料調査報告　1』　愛知県教育委員会　1974

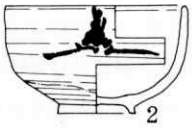


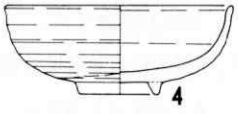
図版　Ⅰ

1　定助窯跡出土
2　〃
3　李兵衛窯跡出土
4　東洞窯跡出土
5　市左衛門窯跡出土
6　〃
7　〃
8　〃

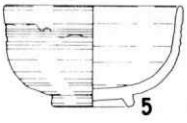
Ⅳ期

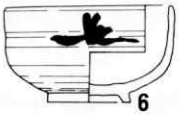


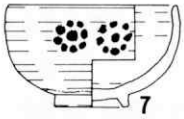


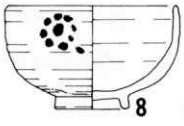


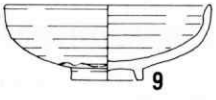
Ⅴ期



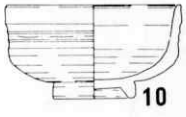


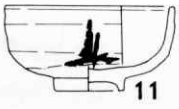


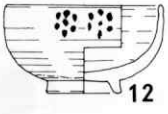


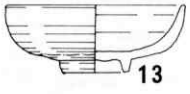


Ⅵ期

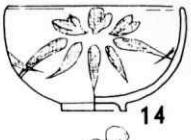


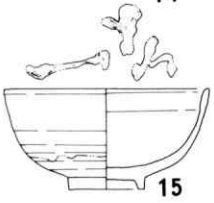


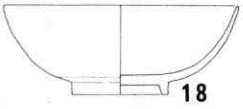


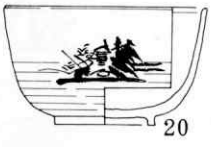


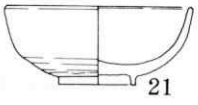
参考資料

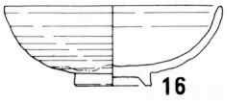


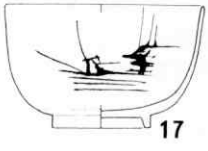


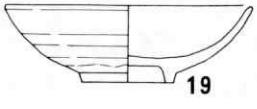


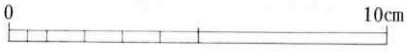












図版 Ⅱ

1	市左衛門窯跡出土	**12**	勇右衛門窯跡出土
2	白川公園遺跡出土	**13**	〃
3	杢兵衛窯跡出土	**14**	杢兵衛窯跡出土(上絵付)
4	尾呂窯跡出土	**15**	市左衛門窯跡出土
5	勇右衛門窯跡出土	**16**	〃
6	市左衛門窯跡出土	**17**	鍋島藩窯跡出土(福次印)
7	勇右衛門窯跡出土	**18**	〃 (森印)
8	〃	**19**	椎ノ峯下窯跡出土
9	〃	20	小鳥町遺跡出土(小松吉印)
10	〃	21	堅三蔵通遺跡出土(小松久印)
11	新七窯跡出土		